

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊

三冊の本からの
終わりのない問いかけ

長田 博

誰にでも、研究の原点となった本、あるいはその本が視角の片隅に入るだけで、何か厳しい問いかけを受けているような気がする本があるのではないだろうか。ここでは、私にとってのそんな三冊の本についてご紹介したい。いずれ



も個人的なものであり、誰にでもお薦めできるような本ではないが、少なくとも、個々の読者がそれぞれの研究分野で、私にとってのこの三冊に匹敵する三冊の本は何かと思いを巡らせていただくきっかけになれば幸いである。なお、筆者は、アジア経済研究所と大学において約四〇年間、開発経済学と国際経済学のアプローチにより、発展途上経済を研究してきた者である。

一冊目は、私が経済開発を考えるとときのフレームワークの雛形となり、今も重視している次の本である。

W・W・ロストウ著、木村健康・久保まち子・村上泰亮訳「一九六一」『経済発展の諸段階—一つの非共産党宣言—』ダイヤモンド社。

古い本であるので、現在では、原著第二版（参考文献①）の方が

入手しやすいのではないかと思う。また、少し刺激的な副題がついているが、紹介の趣旨とは関係がないので気にしないでいただきたい。

この本は、経済史家としてのロストウが一国の経済発展がどのようにして起こるかについて産業革命後のイギリス、ヨーロッパ諸国、新大陸（アメリカ、カナダ）、ロシア、日本の経済発展史の研究をもとに経済発展段階を一般化したもので、各段階の特徴と段階移行のメカニズムについて論じている。当時の後発国によるキャッチアップのプロセスに注目しているという点で、現在の国際開発問題にとつても大きな示唆を持つ。「離陸（テイク・オフ）」という言葉をも有名にしたのもこの本である。私にとって有用なのは、「伝統的社会」から「離陸のための先行条

件期」、そして「離陸期」への変化を論じた部分である。これらの段階では、経済、政治、社会、制度、さらには人々の価値観の変化までが、相互に有機的に関連するフレームワークの中で論じられる。先行条件期には、中央集権の強化、諸制度の整備、農業生産性の上昇、社会的間接資本の整備が進み、離陸期には貯蓄・投資の増大と主導産業の出現が必要とされる。

個人的な話で恐縮であるが、私の四〇年前の修士論文の題目は『テイクオフの三大条件』で、このロウトウ的なフレームワークの中に、人口圧力の回避、農業生産性の上昇、工業化（主導産業の出現）を発展の三大条件として位置づけた。そして各条件の説明に、緑の革命、輸入代替工業化論・輸出指向工業化論、幼稚産業保護論、二部門経済発展論などの個々の研究分野の成果を組み込んだ。現在でも、このフレームワークを江戸末期から明治期にかけての日本の経済発展にあてはめ、発展の要素と制度間の関係を示すひとつのフレームワークとして、講義で使っている。

国際開発研究の個々の分野は、

ロストウの時代から大きく発展した。しかし、発展の各種要因を有機的につなげて考えるということができなければ、現実的な政策提言は困難である。この本の背表紙を見るたびに、「研究中の開発経済分析は、その制約あるいは与件を十分に意識したものか？」と問いかけてある気がする。お読みになる場合には、序論から第五章までをお薦めしたい。

二冊目は、学問の社会的役割および責任を考えさせる次の本である。

宮崎勇「一九六四」『軍縮の経済学』岩波新書五三八、岩波書店。

この本を見るたび、「経済学でも、一見経済学の守備範囲を超えたような人類社会の大きな課題、多くの問題の根源となっている課題に挑戦できるはず。そのことがわかっているか？」と問いかけられている気がする。

この本は、官庁エコノミストとして活躍した宮崎勇氏が国連本部の経済社会局での経験をも踏まえて帰国後執筆されたものである。当時の世界は東西陣営に分かれた冷戦期にあり、軍縮が大きな世界的課題となっていた。そこで、宮崎氏は「経済的に見て何が冷戦か

ら軍縮への移行を阻んでいるのか、あるいは移行するには経済の仕組みをどうすべきかを追求する」(四四ページから引用)のを目的として本書を書いた。原爆の悲劇を知った科学者達の平和運動の本(参考文献②)が広く読まれた時代で、平和の達成への道筋である「軍縮」は、推進しなければならぬという意識は皆が持っていた。しかし、軍事支出が経済活動を支えている面は無視できない

ので、軍縮により経済が減速するのは仕方がない、若き日の私も含めて多くの人がそう思い込んで、そこで思考を停止していた。そういう時代に、軍縮は少し長いスパーンで見れば世界経済にとつてメリットが大きいことが本書によって示された。経済学でもこういう問題を前向きに扱うことが出来るのだと知らされて、雷に打たれたような気がした。経済研究者として生きるうえでの光明であり、まさに「目から鱗」であった。たまたま、今回読み直してみたら、「軍縮」の本ではあるが、軍縮が途上国経済の発展に大きな貢献をするということが多くの紙幅を割いて論じられていることに気がついた。古い本ではあるが、「軍事支出

平和構築、国際開発」をめぐる今日的課題を考えるうえでも、時代を超えて大きな示唆を持つ本である。

三冊目は、恩師北川一雄の著作「一九四八」『国際貿易理論の研究』有斐閣である。

この本は、戦後の混乱期である昭和二二年秋に完成し、翌年出版された。そういう時代に、海外の国際貿易理論の重要な著作に目を通し、それらを極めて適切かつ大きな理論体系の中に批判的検討と共に位置づけ、鋭く厳密な叙述で終始している。著作の内容を論ずる前に、あのような厳しい経済社会状況のもとで、この様な諸作をものした恩師の研究者としての妥協を許さない姿勢と研究意欲に畏怖の念を抱く。時代を経て赤茶けたこの本を見るたびに、「研究のための努力を惜しむな！」と今は亡き恩師から叱咤されている気がして、自分の研究者としての未熟さ、レベルの低さを思い知らされる。この本は、読者の皆さんにお勧めするという種類の本ではない。しかし、読者の皆さんにも、その本を手取るたびに身近に過ぎたその著者のことが思い出されたり、あるいはその本を読んだ

頃の特別の思い出がよみがえったりして、何か問いかけられている、あるいは叱咤激励されているように感じる一冊の本があるのでないだろうか。

(おさだ ひろし/名古屋大学大学院国際開発研究科教授(執筆時)「開発経済学」)

《参考文献》

①W. W. Rostow [1971] *The Stages of Economic Growth — A Non-Communist Manifesto* —, Second Edition, Cambridge University Press.

②湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一編著「一九六三」『平和時代を創造するために—科学者は訴える—』岩波新書四七六、岩波書店。